

## 理想自己とセルフ・ハンディキャッピング傾向の関連

セルフハンディキャッピング(以下 SH)方略と自尊感情の関連についての研究は多く行われているが、SH 方略と自尊感情の関係性は不確かなものとなっている(伊藤 1991)。龍・氏原・上田・小川内(2002)は SH 方略を採用するのは自尊感情の高低ではなく、自己概念の安定性によって左右されると述べている。そこで今回は、自己概念の中でも理想自己と現実自己の差異に注目し SH 方略との関連を検討した。また、理想自己と現実自己の差異があっても将来についての捉え方によって異なった SH 方略を用いる可能性を考慮し、未来イメージ尺度との関連も検討した。被験者は、大学生 272 名(男性 116 名、女性 156 名)。

理想自己と現実自己の差異(以下 Dpi)得点(高群・低群)と未来イメージ得点(ポジティブ群・ネガティブ群:以下 P 群・N 群)を独立変数、SH 尺度の下位尺度である「弁解」「抑鬱感情」「回避傾向」の 3 因子を従属変数とした 2×2 の分散分析を行ったところ、「回避傾向」の Dpi 得点と未来イメージ得点の交互作用が有意であった。単純主効果の検定の結果、P 群における Dpi 得点が有意であった。そのため、未来に対してのイメージがポジティブの場合であれば、理想自己と現実自己の差異が小さい場合よりも大きい場合のほうが、課題に対して自ら最善の状況を求めず、準備不足になりやすい SH の方略を採用しやすいことが予測された。